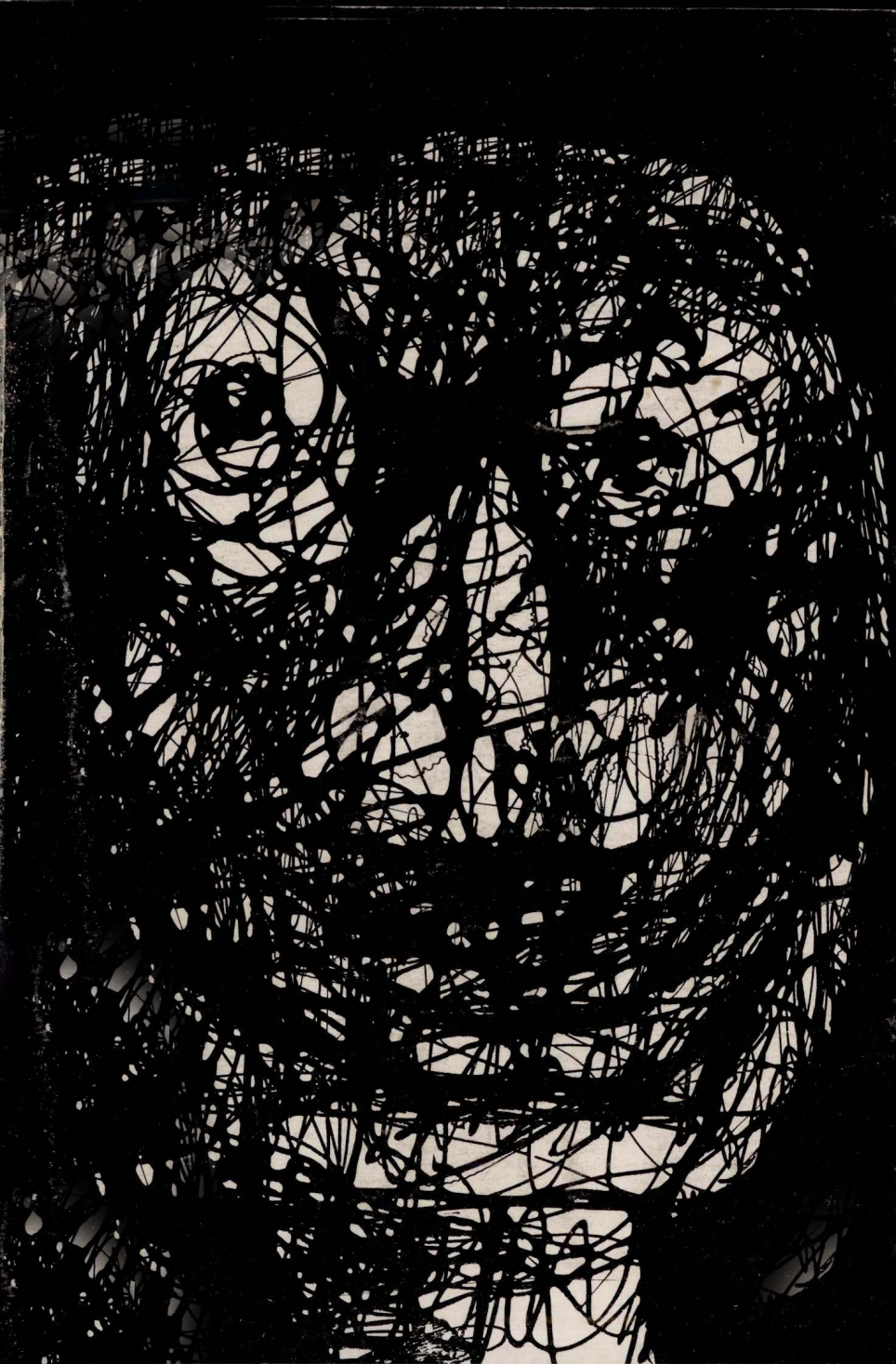




戦中派不戦日記

山田風太郎

番町書房

戰中派不戰日記

六八〇円

昭和四十六年一月二十五日 初版印刷
昭和四十六年二月一日 初版発行

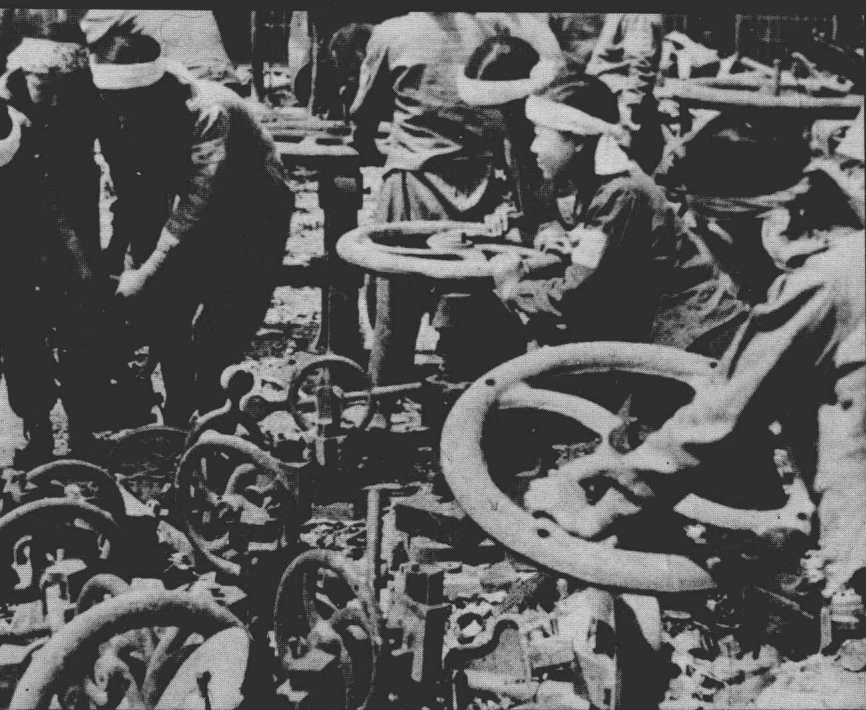
検印廃止

著者 山田 風太郎
発行者 遠藤 左介
印刷 株式会社堀内印刷所
製本 太陽印刷工業株式会社
發行所 板倉製本株式会社
番町書房

東京都中央区京橋三ノ五 一〇四 ©一九七一
TEL(五六七)〇三二一(代) 振替東京一五八四四

0095-720280-6959

昭和二十年の記録



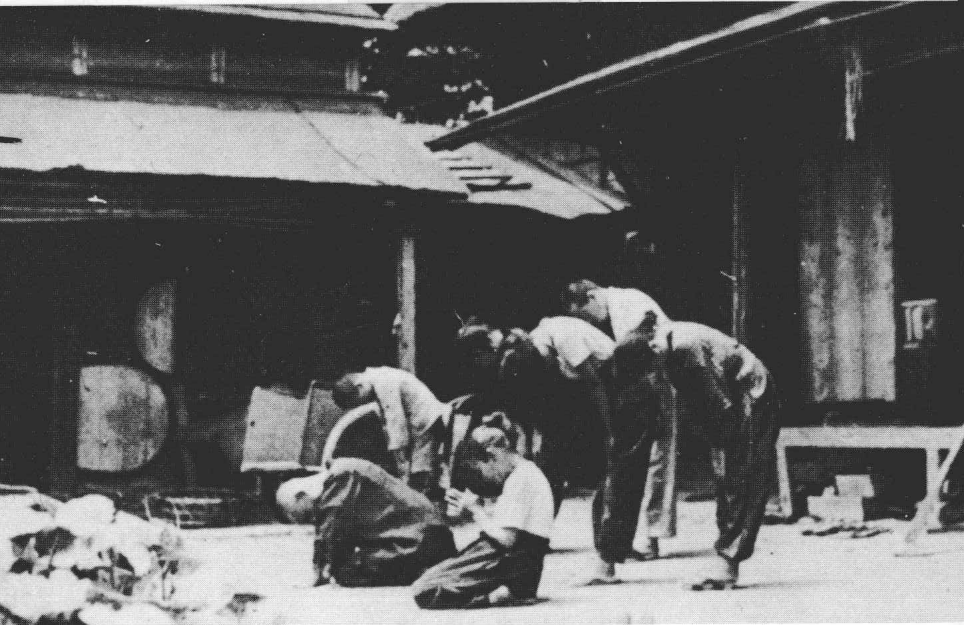
▲勤労働員で活躍する小学徒挺身隊

焦土を整地する学徒▶



▼戦災地に野菜配給（配給挺身隊）





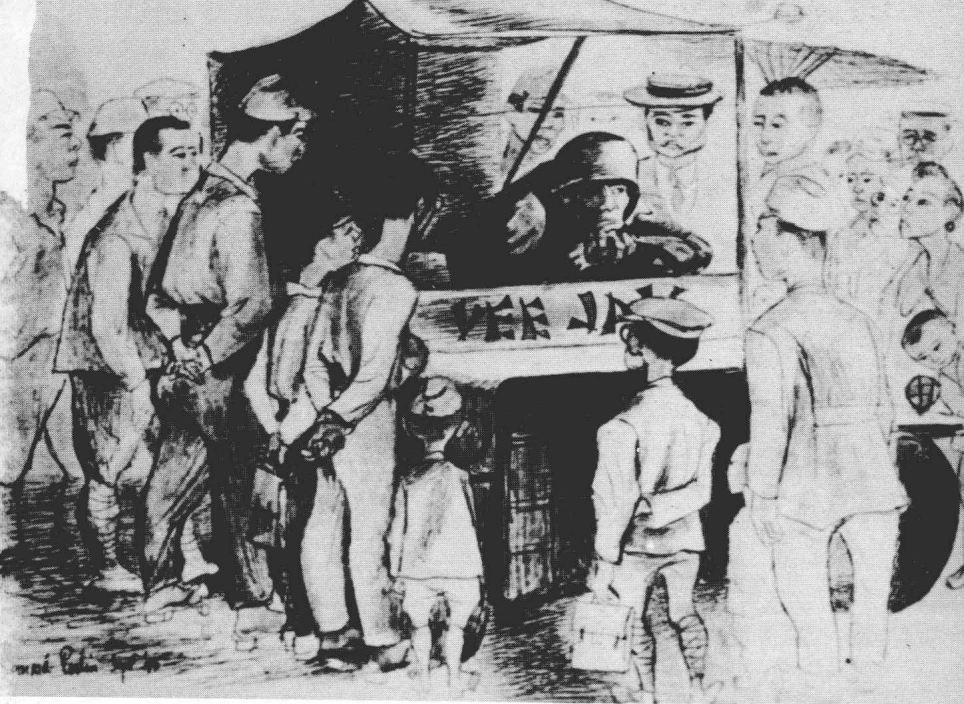
▲聖慮に感泣肅然として皇居を遙拝

▼買出し部隊の群

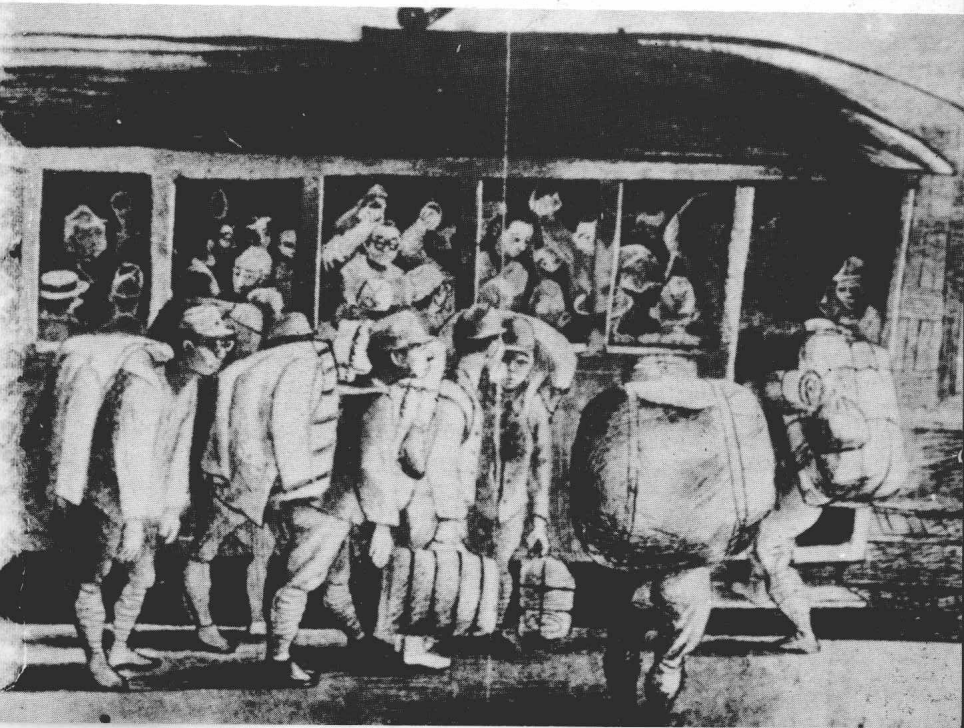


▼荒涼とした銀座を歩く人びと





▲アメリカ人画家の見た敗戦東京の姿▼



まえがき

——私の見た「昭和二十年」の記録である。

いうまでもなく日本歴史上、これほど——物理的にも——日本人の多量の血と涙が流された一年はなかったであろう。そして敗北につづく凄じい百八十度転回——すなわち、これほど恐るべきドラマチックな一年間はなかったであろう。

ただ私はそのドラマの中の通行人であった。当時私は満二十三歳の医学生であって、最も「死にどき」の年代にありながら戦争にさえ参加しなかった。「戦中派不戦日記」と題したのはそのためである。

従って、汗牛充棟の敗戦記録に私のこんなものを加えるのは、どれだけ意味があるのか、本人にはわからない。これはあのころの民衆すべての体験であって、特別異常なものではないからである。

ただ戦記や外交記録などに較べれば、一般民衆側の記録は、あるようで意外に少ない。さらにその戦記や外交記録にしても、その記録者がその出来事に直接参加していなかったり、また参加しているにもかかわらず、記録者自身の言動、そのなまの耳目にふれた周囲の雰囲気を活写したものが

稀である。敗戦後十年ばかりこの現象を、私は記録者がアメリカに対して憚^{はば}っているものと思つていた。ところが、その後に至っても次々に出て来た記録は、数字的には正確になった一面はあるものの、他方、意識的無意識的にかえて嘘や法螺や口ぬぐいや回想には免れがたい変質の傾向が甚だしくなったように感じられる。むしろ終戦直後のものの方が、腹を立てて書いているだけにかえて真実の息吹を伝えているものが多いことを再発見した。

だから、あの戦争の、特に民衆側の真実の脈搏を伝えた記録が出来ただけ欲しい——例えば、突飛な例を持ち出すようだが、戦国時代における民衆の精細な記録があれば今どれくらい貴重な文献になるだろう——と私は思う。私のみならず、さきに「暮しの手帖社」が、戦争中の『暮しの記録』を出版したのも同じ気持ちからであろうと思う。そこで、その目的のための九牛の一毛にでもと、粗悪な紙にもはや鉛筆のあとでも薄れかかったこの日記をとり出して来たのだが、それにしても国家の大事とはおよそ縁遠い、貧しい一医学生の日記が、例えその書かれた当時の心境、外部の景観などに一点の嘘はないにしても、もとよりそれほど貴重なものであらうはずがない。この日記が右の目的にそうものであるかどうかは疑問である。

さらに私をひるませたのは、当時これを、読者を意識に入れて将来のための記録として残すという意識が——荷風のごとく——明確になかったということから来る不充分的点である。当然のことであるが、私は当時作家でもなければ、そんなものになる意志もなく、またのちに現代のような時

代が訪れようとはまったく想像を絶したことであった。それにまた日記というものはふつう世相を写すのが目的ではなく、身辺雑事、あるいは自分自身との対話が多いものである。従っていまから思えば、例えば当時の毎日の食物などについてもっと精密な記録を残しておけばよかったなどの悔いはあるが、その時点においては、それはあまりに日常化していたから、特に書くに値しなかったのである。空腹の描写が少ないのは、そのとき空腹でなかったということではない。ただしそういう「暮し」に密着した事象に無関心な観念的な年齢のゆえもある。また自分と関係のない空襲の罹災地をわざわざ見に行くことが少なかったのも——もとより電車の杜絶などという不可抗力もあったにせよ——同じ日常化という理由からである。のみならず、例え記録を意識した時があったにしても、本人の力量不足で描写未熟、それどころか案外ノンビリしているところもあるではないかと思われるかも知れないが、それもまた一つの真実である。無用な文章も多いが、とにかく残っているのは、ゆきつく果ては知らず、一日ごとにありのまま、感じ、見たことを記録したこの日記だけなのである。（ただし、実際はその当日に書けず、数日後に書いたものを当日にひき戻した部分の数か所あるけれど）

以上のことを承知していて、なおあえて公けにするのは、繰返すようだが、あのころの世相、民衆の真実の姿は、その一面に関するかぎり当時新聞も存在しないにひとしく、甚だその記録が稀なので、記録という明確な意識はなかったにしろ、ともかくも私が記した断片に、その——明日のこ

とも知らぬ、哀れな、絶望的な、そのくせたちまち希望をとりもどして生きてゆく楽天的な日本人の姿が——幾分でも反映していやしいかと思われるからである。

ただし、断るまでもなく、あくまでも九牛の一毛的記録である。しかも二十三歳の医学生という比較的身軽な立場から書かれたもので、真に書かれるべきは、家族も家も職も、或いは本人の命さえ奪われた多くの人々の記録であつたろう。ただ、その人々の多くは、そういうギリギリの立場のために日々このような閑文字を残す余裕がなかったに相違ない。

なお、そんな青二才のくせに、文中「余は」などとエラそうに書いているのは、日記の中の自称としては、日本語中この文字が最も簡略だからである。それから、現在、当時の私と同年齢にある人が、当時の青年はだれもがこんな文語体で書いたのかと思われるかも知れないが、やはり当時としても現代同様の口語体で書く若い人の方が普通であつたと思う。みずから読み返してみても、八月十五日以前は文語体が多く、以後は口語体が多いような現象が可笑しい。

山田風太郎

戰中派不戰日記

装帧■司修

昭和二十年

一月一日(月) 薄曇のち晴

○運命の年明く。日本の存亡この一年にかかる。祈るらく、祖国のために生き、祖国のために死なんの心。

○昨夜十時、午前零時、黎明五時、三回にわたってB29来襲。除夜の鐘は凄絶なる迎撃の砲音、清め火は炎々たる火の色なり。浅草蔵前附近に投弾ありし由。この一夜、焼けたる家千軒にちかしと。

○午前高輪螺子にゆく。振袖にかつこ下駄の愛らしき少女いずこへ消えたりや。凄涼の街頭、ただ音たててひるがえるは戸毎の国旗のみ。高輪螺子にて先日の子、その他くるま海老、豚などにて飲み、酔いて帰る。午後より家にてまた飲み、夕ついにエルブレッツヘン(嘔吐)し、泥のごとく眠る。

二日(火) 晴風強し

○浅草仲店界限元旦の空爆で焼けたる由。

○矢崎徳光『不滅の科学者』を読む。

三日(水) 晴

○午前、加藤家の清女さん来る。午後送りて、高須さんと

御徒町へゆく。

大みそかの空爆にて、三百軒ばかり焼けたる跡を見る。縄張りめぐらせど、何しろ場所広ければその惨澹の景余すところなく見得るなり。げに人間の住みしあとは汚なきものかな。トタン板、焼け石、焼け残りの柱、道具。ところどころにむしろ敷きて、被災者のむれ、整理に働く。いたるところ立退き先を書ける貼紙あり。いまだ余燼鼻をさし、焼失地周辺の家々の持ち出したるたたみや家具や——燃えて無き焼跡よりもむしろこの方が当夜の人々の混乱を想像せしむ。蒼白にひきつりし顔、見ひらかれたる眼、わけのわからぬ絶叫をあげし口など、まざまざと胸痛きまでに思い描かる。

地下鉄にて渋谷に戻り、夕暮目黒に帰る。

○水飴石油罐に千円。鑑ふし一本七十円なりと。

岡山辺では米一升三十円なる由。ただしこれは疎開者のなせるわざなりと。

○菊池寛の短編集を読む。彼の小説はまるまっちくふとれる職人の手より作り出だされる美しき菓子のごとし。ただし一般にいわれるほど価値なき作家にあらず。むしろ、芥川の小説よりも妖気あり。芥川の皮肉には涙あり、寛の皮肉には滑稽あり、妖気はここより発す。これ彼の人柄より出づるものならん。

四日(木) 晴

○午前改めてガス会社にゆく。

○夜八時十五分警報発令。敵一機静岡侵入。

○川端康成の短編集を読む。

五日(金) 晴

○朝五時、敵またも静岡侵入。関東西部に來り、信越南部に向い、さらに西進して去る。

○夜八時、敵一機東北方より帝都に入り、投弾して去る。

二階に上るに、芝—新橋のあたりなるべきか、炎上、雲に映りて魚の腸のごとし。

六日(土) 晴

敵寄する比島の磯へ

あがる濤朱に染まりて

燃ゆる日も煙に錆びつ

火の矢なし神風吹けど

吹雪なし神兵降れど

千万の敵いかにせむ

海覆う船いかにせむ。

ああ比島戦局徐々に暗転せんとす。

過去のすべての正月は、個人国民ともにそれぞれ何らの希望ありき。目算ありき。今年こそはあの仕事やらん、身体を鍛えん、怒らざらむ等々。よしそのの成らざるも、一年の計を元旦になすは、元旦の楽しみの一つなりき。しかも今年に限りてかかる目算立つる人一人もあらざるべし。

連日連夜敵機来襲し、南北東西に突忽として火炎あがり、人惨死す。明日の命知れずとは、まさに今の時勢をいうなるべし。ただし人は、他の死するも吾は死なずと理由なき自信を有するものなれば、必ずしも一日一日戦々競々として暮しあるものにはあらざれども、ただ——日本の興亡のみは実に理由なき希望のみにては安閑たるを得ざるなり。

もとより誰しも、日本は滅ばずと思う。されどその根拠となすは、いまやいわゆる日本魂よりほかになし。しかれども米はまたその富強に頼り、支那はその広大に頼り、英はその不敗の伝統に頼る。根拠とするところのものは各国異なれども、その頼らんとする心理や同じ。然り而うして、その日本人の心理の、実に根本的より動揺せざるを得ざるは、苛烈なる、酷薄なる戦局なり。日本無くんばすべて無し。各自の智恵も富も力も理想もすべてその根底より崩壊せざるを得ず。勝ちたらば——など夢みるもの一人もなし。

ただ全日本人が夢遊病者のごとく、物に憑かれたるがごと

く、この凄烈暗澹たる日本の運命を、両手にて支え、一切他事と思う余裕なきが、この正月の気分なり。

○学徒の勤勞動員問題に關し、新聞の論調、文部当局を責めて嚴烈なり。

わが校、今年はなるべく浪人を入学させる由。最近の中学生は勤勞動員のため全然知識なく、入学後の授業に耐うべからざるゆえなりと。

○未明五時敵機また至る。焼夷彈を投下して去る。

○午前、水道橋にゆき柳町にて都電下車、高須さんの知人金沢さん宅へ、薪もらいにゆく。留守なればむなく帰る。

○「浅草に三龜松のドドイツをさきにゆかないか」と勇太郎君がいうので、午後、地下鉄で浅草にゆく。浅草花月に入る。

上田竜児なるものの鉄棒あり。二人で大車輪などやる。もう一人いたりしが、きのう舞台に固着せしはずの鉄棒ぬけて観客席に転落せし由。

次に川田義雄の「八五郎一番手柄」なる芝居あり。のど痛めたりとて白布にて湿布す。喜劇なれば、チョンマゲに湿布しようと眼鏡かけようとサルマタをはこうと支障なし、氣楽なものなり。ただし、この喜劇は全然可笑しくも悲しくもない。よくこれで浅草に出るものだと見ている方で恥ずかしく

なるような劣等無氣力の芝居なり。

最後に柳家三龜松出づ。当代ドドイツの名人、さすが何も分らざる吾らにも、その冴えわたりたる撥の音、鼓膜を打つ。マイクが今の舞台になくなりし由。そこらの歌手は大閉口の模様なれども私なんぞは平氣なり、といばりて、婦系図や明治一代女の映画説明をやりつつ、中にドドイツをさしはさむ。終りに大河内や阪妻の劍戟の真似をす。

三龜松、さすがに紋付袴イタにつき、その痛快なるべらんめえ調、観客への愛嬌と罵倒、皮肉とシャレと自嘲的な二ガ笑い、まことに江戸人的なり。これで帰れば防空副団長なる由。

「かの憎むべきB公が……」などいいて笑わしむ。高輪の親分はB29のことをボー助と呼ぶ。このあいだ來訪せる某婦人はその子に「さあさ、早く帰らないとプーちゃんが來ますからね」といへり。これらサイレンの音の形容ならんが、何でも茶化す江戸っ子の氣風、昭和二十年になお残る。

花月を出づれば外蒼茫。盛り場、いたるところに疎閑空地作り、実に荒涼たり。「浅草もヒドくなつたなあ!」との嘆声きこゆ。さすがに人波あり。たちまち「すり! すり!」と叫びて人波の向うを四、五人駆けゆくが見ゆ。これにてはじめて、ちよつと浅草情緒を感じたり。

○夜七時四十分、警戒警報。敵伊豆より侵入。帝都の西、北、東と廻りて脱去。

七日(日) 晴

○朝五時半警報発令。それまでに夢を見る。

人間は全然現われず、ただ新聞の記事ばかりの夢なり。

「独逸力闖空しくついに屈服す」と大見出しあり、ヒトラー總統の写真など出づ。下に帝國政府声明の記事あり、陸軍總司令官は閑院宮殿下、海軍司令長官は東郷平八郎に更迭し、断乎戦争を継続することなり。

余は、これらの人々は偉大なり、されどまた一種の偶像にして、果して今の近代戦を指揮する能力ありやと心配す。

二面を見れば「B 29 日本昼間爆撃の機能喪失」とあり、日本の攻撃により、B 29 は今後昼間爆撃の基地を失い、夜間のみとなれる由書かる。これは面妖なり。B 29 は夜間と昼間との発進基地ちがうものなりやと思えども、ともかく痛し痒しの思いにて読む。而して、さめてこの夢を高須氏夫妻に語る。——ところが、それも夢なりき。

朝飯のとき、この夢を語らんとせしが、その景、夢中のありさまと同じなればやめにせり。奥さんも昨夜の夢を語る。買出しの夢なりきと。

○銭湯。

自分が東京の銭湯についてはじめてきいたのは、九つか十のときであった。当時東京にいた一人の叔父が入院して、その看護のために母が妹をつれて上京したので、その土産話の一つにこの東京のお風呂屋があったのである。

壁も床もタイル貼りでかがやくようであり、栓一つひねれば水も湯もシャワーも自由自在に溢れ出る。妹などは、その美しい床に难道滑ってころんだかわからない——などきいた話のきれぎれが頭の奥に残っていたので、中学時代にローマのカラカラ浴場や、ムガール王宮のハمام浴場のことなど読んだとき、まさかそれほどは思わなかったにしろ、壮麗な円柱を夢のようにほかす湯けむりの中をゆきかう美しい裸体の都びとの光景は、充分古代の大浴場の幻想の中に溶けこんで来た。

はじめて東京に出て来て、はじめていった銭湯は牛込の袋町にちかい銭湯であったが、このときは敏捷な東京の人に恐れをなしていたのと、桶を手に入れ、石鹼を離すまいとする緊張に一心不乱になっていたのと、それに東京の幻滅は、風呂などよりほかのもっと大きなことで、毎日毎時間暗い湖のように心に流れこんでいたから、銭湯の美醜など、今も胸に残るような強い印象として残ってはいない。